

座談会

『習近平 国政運営を語る』を読んで
トップの人柄や考え方を知る手がかり

李源＝文 吳亦為＝写真

中国で昨年 10 月、『習近平 国政運営を語る』が出版された。この本には、中国の共産党と国家の最高指導者である習近平氏の演説やインタビューなど 79 編と青年時代から家庭生活や視察などの珍しい写真 45 枚が収録されている。すでに中国語版のほか、英語や日本語などに翻訳され、現在、日本でも購読できる。中国のトップの発言録が、就任わずか 2 年で出版されたケースは前例がなく、習近平氏の人柄やその政策理念、発展路線の方針を理解するうえで、大きな手がかりを与えてくれる、と評判だ。この本を読んだ中日関係に詳しい方々に集まってもらい、感想を語り合ってもらった。(文中敬称略)

自分の言葉で語る魅力

——司会 (近藤大博) まず、この本を最初に手に取られた時の感想からうかがいましょう。

石川嘉英 中国のトップリーダーが何を考え、どうしようとしているのかが、彼自身の言葉で紹介されている。この本の発行は、それ自体大きな事業と言える。日本の政財界の有力者や学者が読むのは当然だが、特に中国に進出している日本企業の本社のトップが読むべきである。中国の指導部の考えがよくわかるからだ。

村田忠禧 米国のオバマ大統領も、この本を読むように推薦しているという。

岡田実 しかし日本の多くの読者に読んでもらおうとするなら、本の表紙に帯をつけ、本の内容をコンパクトに紹介するなどの工夫が必要だろう。タイトルも「国政運営を語る」では抽象的すぎるのでは。

横堀克己 500 ページ以上で重さ 1 キロ近い大著にびっくりした。しかし、これを全部読破するのは大変。せめて上下 2 冊か上中下 3 冊に分けてくれると読みやすく、持ち運びにも便利だ。テーマごとに章を立てて時系列でまとめているのはよいと思う。

村田 習氏の文章からは、彼が非常に個性のある指導者であることが感じとれる。自分自身の言葉で語っている点に魅力を感じた。古典の引用は非常に適切だと思う。

「大衆路線」と「法治」強調

——司会 それでは中身の議論に入りましょう。まず内政から。

石川 習氏は 2012 年 11 月のスピーチで「中華民族の偉大な復興を実現することこそが、中華民族が近代以来抱き続けてきた最も偉大な夢である」と述べ、その夢は「二つの百年」（2021 年の中国共産党創立 100 周年までに「小康（ややゆとりのある）社会」の実現と 2049 年の建国 100 周年までに社会主義現代化国家を築き上げる）までに「必ずかなえられることを固く信じている」と強調した。これを国内的な視点から見れば、「大衆路線」を堅持し、腐敗を撲滅すると

い

うことだろう。最近の事例から見れば、習主席は相当な覚悟を持ってことに当たっていると思われる。拝金主義が横行していると言われる中国で、「中国の夢」を提示するのは、むしろ改革開放が第二段階に入った中国の精神的な支えにするためではないか。

村田 改革開放政策後の指導者たちは、「毛沢東思想」の三つの基本点の中の「实事求是」を強調してきたが、「大衆路線」と「独立自主」の二点は、あまり強く打ち出したことはない。しかし、習氏は「大衆路線」と「独立自主」についても多く論じている。広範な人民の利益を代表する、と自ら言うのではなく、代表しているか否かは人民が評価するものであるとして、党員の任務は「人民に奉仕する」ことだと強調していることは重要である。その点をおろそかにしたことが、腐敗問題を深刻化させる根源となっているからである。

岡田 「大衆路線」について習氏が「形式主義」「官僚主義」に対する批判を具体的に展開しているのが印象深かった。私は長年、国際協力で中国のポリオ撲滅に携わってきたが、中国の一番の問題はこの辺にあると思う。指導者はなかなか現場のことを正確に把握できない。「上に政策あれば下に対策あり」で、「ワクチンはペンで接種するんじゃない！」といくら上から批判してもなかなかありのままの実態は上に報告されないし、上は確かめない。習氏の批判は非常に具体的である。

藤本豪 習氏は 2012 年 12 月、「現行憲法公布施行 30 周年」のスピーチで「中国の特色ある社会主義政治発展の道を堅持するカギは、党の指導の堅持、人民が主人公であること、法により国を治めることの有機的統一である」と述べている。このスピーチからは、中国の法治は、政治発展の三本柱の一つとされていて、中国共産党は、世界情勢や国の発展をよく見ながら、国民一人ひとりの幸福のために政策を策定し、中国全土でしっかりそれを実施していくことを追求している、と私は理解した。

しかし中国は広くて人口が多く、多民族国家であり、このような国を治めるのは難事業である。だからこそすべての公務員が法令を厳格に守る必要があり、法治は中国の国政運営に極めて重要である。この本を読んで、法治の実現に対

する習氏のなみなみならぬ決意を感じ取った。

周辺外交と大国関係の変化

——司会 外交面ではどのような変化がみられるでしょうか。

野田英二郎 習氏の外交は、中国が改革開放政策を始めて以来の流れを基本的に引き継いだものであるが、以前よりもはるかに流動的で変転の激しい今日の世界情勢の中で、より自信を持ち、引き続き一貫して平和的外交の基本路線を堅持し、発展させようとするを明白に示しており、きわめて注目すべきものだ。具体的には、第十一章で平和的発展と平和共存5原則の堅持を強調、第十二章で中ロ、中米の新型大国関係を構築する意思を表明、第十三章でシルクロード経済ベルトの構築、アセアン諸国との善隣友好協力条約の締結の願いの表明などはその証拠である。

岡田 周辺外交については、2013年10月に開かれた「周辺外交活動座談会」での習氏の談話で非常に明白に述べられている。「二つの大局」として国内的には「二つの百年」の実現、国際的には良好な外部条件を勝ち取ることが重要であるということだ。特に注目すべきは「互惠協力深化の戦略的接点」という言い方である。日中間では「戦略的互惠関係」が合意されているが、その接点をどこに求めるかがこれからの課題であろう。平和的な発展についてもっとPRして、日本を含む周辺諸国に脅威を感じさせないように、認識上のギャップを解消すべきである。

野田 中国の周辺国からすれば、中国は巨大な存在で、心理的な圧迫感を感じている。しかし、周辺国としては、中国の勃興は、超大国だった中国の歴史上の地位を回復する過程に過ぎないと考えるのが妥当だろう。とはいえ、急速な発展を遂げている中国への適応には時間を要する。このような状況につき、中国が十分な配慮を尽くすことが望ましい。習主席の「海のシルクロード」についての演説の中で、「地域の安全保障を築くことを念頭において、常に平和的な方法で、平等な対話と友好的協議を行い、意見の不一致を適切に処理し、地域の安全の大局を守る」と述べているところに注目したい。日本も中国の周辺国のひとつである。歴史の教訓から、中国とは友好以外の選択肢はない。日本もその他の中国周辺国と変わらない位置にあると認識するべきである。

岡田 発展し、巨大になりつつある中国が世界にどのようなイメージを与えているのか、習氏自身、明白に分かっているようである。2014年3月、ドイツで行った演説で習氏は「中国が発展し勃興したら、必然的に一種の『脅威』となるし、ひいては中国を悪魔の『メフィストフェレス』のように描き、まるで

いつの日か中国が世界の魂を吸収してしまうとさえ考えている」と述べている。

横堀 この演説で習氏はこうも述べている。「歴史はもっともよい教師である」とし、アヘン戦争以来 100 年余り中国人民は戦火に苦しめられてきた、とし「日本の軍国主義が発動した中国侵略戦争だけで、中国の軍民に 3500 万人以上の死傷者を出す惨劇を引き起こした。この悲惨な歴史は中国人の骨身に刻み込まれた記憶として残っている」と指摘した。しかしそのうえで「中国人は従来『己の欲せざる所は人に施すなかれ』を希求してきた」とし、中国が平和的發展を堅持し、世界平和を擁護してこそ、中国自身の目標を実現でき、世界にさらに大きな貢献ができるとしている。そして「中国は『国が強大になれば必ず覇を唱える』という古い論理に同意しない」と述べている点に注目したい。

野田 米中関係について言えば、胡錦濤主席時代に提起された「大国関係」という考え方を習氏が引き継ぎ、さらに米国と煮詰めてゆく意欲をしめしている。中国の国力の増大は飛躍的であり、その国際外交における地位と影響力も以前とは比べ物にならないので、以前よりは、自信とゆとりを持って、さまざまな分野での交流を続けてゆくものと予測できる。

中国が求めている「大国関係」とは、大国間において真の対等・平等・相互尊重の関係が現実化することである。日本としては中米の二大大国の友好協力が安定的に發展し、アジア情勢の平和をもたらすことを希望するものであり、アセアン諸国も同様であると考ええる。

日本のメディアは中国が対米外交に行き詰まっているかのような印象を与える報道が多く見られる。しかし、中米の不一致が顕在化したとすれば、これはむしろ両国の専門家たちが、幅広く各般の問題につき、率直な意見交換を行っており、すでに緊密な意思疎通が高度のレベルに達していることを示すものと認識すべきであろう。日本も「日米同盟」至上の思考停止に陥ることなく、柔軟な思考を心がけるべきである。

改訂版が出されるなら

——**司会** 内政、外交にわたって中国の最高指導者としての考え方はかなり理解が深まったと思いますが、日本に関する記述が思いのほか少ないというのが大方の印象でしょう。

横堀 それにはわけがあるようだ。この本の第 1 版の印刷発行は昨年 10 月だが、日本語翻訳作業は 8 月ごろから始まった。だから 8 月の抗日戦争勝利記念日や 12 月の南京大虐殺犠牲者国家追悼日に行われた習氏の演説、さらに A P E C の際の日中首脳会談などは、時間的に収録できなかったと思われる。改訂版

が出されれば、ぜひこれらを収録してほしいものだ。

石川 習氏はかつて浙江省党委書記時代、『浙江日報』に 232 篇も文章を書いた。それは『之江新語』として署名入りで出版されている。こうしたものも、改訂版で取り入れてはどうか。

座談会出席者

石川嘉英・元野村証券北京駐在代表

岡田実・拓殖大学国際学部教授

藤本豪・弁護士（中国の法律事務所勤務の経験あり）

野田英二郎・元インド大使

村田忠禧・横浜国立大学名誉教授

横堀克己・「日中未来の会」共同代表、本誌編集顧問

司会 近藤大博・元『中央公論』編集長